

白瀧幾之助筆《金魚と子供》について

—新出の「白瀧幾之助写真資料」を参考にして—

阿部 亜紀（京都女子大学、一般財団法人福田美術振興財団）

白瀧幾之助（1873-1960）は、明治後期から昭和期にかけて白馬会や官展を中心に活躍した洋画家である。画学生時代は生巧館画塾で山本芳翠に、天真道場および東京美術学校で黒田清輝に、1907年にはフランスでラファエル・コランに師事した。帰国後には文部省美術展覧会で二等賞を受け、帝国美術院展覧会の審査員を務めるなど、官展系の画家として活動した。1913年に日本水彩画会、1927年に日本テンペラ画会を立ち上げるなど、新しい画境をも開拓している。結果、彼は1952年に洋画界に尽力した功績を讃えられ、日本芸術院恩賜賞を受賞した。近年では没後50年の節目に初の回顧展が開催され、その画業が概観できるようになった。

本発表で考察するのは、白瀧が1920年頃に描いた大作《金魚と子供》（但陽信用金庫蔵）である。意欲作であるがこれまで先行研究で取り上げられたことはなく、考察もされていない。こうした現状を踏まえ、まずは作品を観察し、制作意図を検討する。

本作は縁側で金魚鉢の中を覗き込む少女と、真横から見つめる男児を描いた風俗画である。場所は1911年から14年間住んだ大森山王の自宅で、モデルは次女の須磨と、長男の弥彦だ。初夏の景であろうか、背景には白瀧が装飾的形狀を備えた花として愛した白百合、紫陽花、アンズリウムといった様々な花が咲き、地面には木漏れ日が落ちている。陰影部分には青みがかった絵の具をふんだんに使用し、新派の画家としての技巧も凝らされている。少し俯瞰的に捉えた画面、右上と左下を地面で隔てて対立させた点、木々、人物、物の配置などからも構図への拘りが推察される。

2018年に白瀧の旧家から発見されたと考えられる「白瀧幾之助写真資料」の中には、本作と類似した構図の写真が3枚含まれる。制作時にはその中の1枚を参考にしたものとみられるが、花々、木製台、ジョウロ、金魚網などが描き加えられており、写真の要素に画家の構想が統合されていることが分かる。画面で重要な役割を果たしている木漏れ日も写真には見られず、彼がいかに「光」を意識していたのかを示唆する。

同様の事例は、1926年作の《春の日》でも指摘できる。本図は白瀧が晩年を過ごした田園調布の自宅で犬と戯れる次女を描いている。写真資料では関係するものが複数存在し、中には長男を被写体に《春の日》と同じ視点から撮影された1枚も含まれる。

写真と絵画の関係性については、浅井忠、竹内栖鳳などについての先行研究があり、制作背景を知るために重要視されてきた。要するに、これは白瀧個人に留まる問題ではない。近代絵画史の研究を進める上では、洋画・日本画ともに、写真を活用することによって絵画が新生面を開き得たという事実をさらに認識する必要があるだろう。こうした背景から、本発表は近代の画家と写真を用いた制作という視点を提示しながら、その画家の個性を見出す道標として設定しようと試みるものである。